



Title	人文学林シンポジウム 傍聴記 「日本語文学」作家、あるいは「日本文学」作家としてのグレゴリー・ケズナジャット
Author(s)	岩本, 雄伍
Citation	大阪大学人文学林シンポジウム グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読む. 2026, p. 7-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105162
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人文学林シンポジウム 傍聴記

「日本語文学」作家、あるいは「日本文学」作家としてのグレゴリー・ケズナジャット

岩本雄伍（日本学専攻博士後期課程）

2025年11月28日、日本語文学を専門とする大学教員であり、現役の作家としても活躍するグレゴリー・ケズナジャット氏を迎え、「グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読む」が開催された。対面のみの開催にもかかわらず、会場には多くの参加者の姿があった。

ケズナジャット氏は、現代日本語文学を語る上で欠かせない存在である。その理由のひとつは、彼が〈日本語で作品を書く外国人〉であるからだろう。「日本語文学」、あるいは「越境文学」の書き手として、氏は母語ではない日本語で執筆を続けるリービ英雄や李琴峰、あるいは日本語を母語としながら外国語でも執筆する多和田葉子など、言語と国の境界を跨ぐ作家とともに注目されてきた。筆者も日本語文学を専攻する大学院生であるが、この分野に興味を抱いたきっかけは、第2回京都文学賞を受賞した氏のデビュー作『鴨川ランナー』（2021）との出会いであった。

「きみが初めて京都を訪れたのは十六歳のときだ。」という一文から物語は始まる。「きみ」という二人称で呼ばれるアメリカ人の主人公は、高校時代に「馴染みのアルファベットを使用しない日本語」に出会う。日本語で営まれる未知の生活を「自分の目で確かめたい」一心で、語学旅行に参加し、大学卒業後には英語教師として京都での生活を始める――。作中では、やがて日本で大学教員となる「きみ」の記憶の断片が綴られていく。ケズナジャット氏の講演を聞いてまず感じたのは、『鴨川ランナー』の設定が氏の経歴と密接に重なっていることであった。作品やインタビューから予想はしていたものの、想像以上に作家自身の地続きの経験がベースにあるのだと改めて認識させられた。

また、ケズナジャット氏が日本語で書く決意をした背景には、当時芥川賞を受賞した楊逸や、文学界新人賞を受賞したイラン出身のシリル・ネザマフィらの存在があったという。日本での生活のなかで、「誰にでも開かれている世界」である本に没入し、文学の中にこそ自分と同じような「外国人の居場所」を見出した氏は、これまでの日本文学のイメージを更新するだけでなく、「日本の主流社会に順応しきれない人々」のリアルを描き続けてきた。こうした視座こそが、作家としての大きな魅力であることは間違いない。

しかし、同時にこうも問いかけてみたい。グレゴリー・ケズナジャットを、あえて「日本文学」の書き手として捉えることはできないだろうか、と。この提案は、何が彼を「日本語文学」という特別なカテゴリーに留めているのか、という問いの裏返しでもある。筆者には、この分類が、外国人が自らの経験を日本語で書くことに対する、日本社会の（無）意識的な〈歓迎〉に起因しているように思えてならないのである。

かつて「日本文学」「国文学」と呼ばれたカテゴリーが「日本語文学」へと拡張された背景には、在日朝鮮人作家・金石範による問題提起があった。帝国の支配言語であった日本語を経由し、あえてその言語で帝国支配の歴史を批判するために、金はこの概念を提示したのである。その後、「日本語文学」という言葉は本来の政治的文脈から離れ、リービ英雄らのような日本語非第一言語の書き手を包含する言葉へと変容した。現在広く使われてい

るこの呼称が、帝国主義の複雑な歴史やその批判性を完全に描けているかは疑わしいが、少なくともケズナジャット氏への言及においては、後者の「越境的」なニュアンスが多いだろう。

では、氏はやはり「日本語文学」という枠組みのなかにのみ位置づけられるべきなのだろうか。ここで、作家の『開墾地』(2023)に目を向けたい。本作の主人公は、イラン人の養父とアメリカ人の母をもつ博士課程の院生であり、日本で博論を書いた後、故郷のアメリカ南部に帰郷する。前作『鴨川ランナー』や最新作『トラジェクトリー』とは異なり、本作には日本の土地や日本語に関する思索は直接的には描かれない。唯一日本を象徴するのは、かつてフィラデルフィア博覧会を機に持ち込まれ、今や特定外来種として排除の対象となった「葛 (kudzu)」だけである。葛の蔦が象徴するのは、アメリカ、日本、イランを覆い尽くすほどの広がりであり、刈られてもなお生い茂る、登場人物たちの記憶の数々である。

本作は日本語で書かれながら、作中の登場人物たちは実際には日本語を話していない。だからこそ、読者は彼らが交わしているはずの英語の響きを想像せずにはいられないのだ。主人公が父との再会時に「この話しぶりを和訳するならどのようなものになるのだろう」と自問するように。ケズナジャット作品に流れる「故郷」というテーマには、「私の／my」や「私たちの／our」、あるいは「あなたの／your」といった多様な所有格が接続されるだろう。しかし、それが意味するものは登場人物のアイデンティティによって異なり、もはや記述言語や書き手の属性は意味をなさなくなる。

『開墾地』は、「日本語文学」という呼称が暗に含む「日本語で作品を書く外国人」という上からのカテゴリー化の権力を告発し、その内側にいながらも枠組みを突き抜けようとする。それによって、「外国人だから、あるいは移民だから書けるのだ」という、マジョリティ側の眼差しに抗おうとする、そんな作品ではないだろうか。

筆者はアジア・太平洋戦争における敗戦と「解放」を経験した、日本と朝鮮半島の文学を研究対象としている。作品を「日本語文学」あるいは「朝鮮語文学」と呼ぶのは、単に執筆言語を指すためではなく、書き手がその言葉でしか表現し得なかった帝国支配の複層性を汲み取るためである。言語や地域を越境したからといって、過去の支配の歴史が免罪されるわけではない。どの言語で書かれていようとも、まずはテキストに刻まれた表現に焦点を当て、ひとつずつ詳細に紐解いていくこと。ケズナジャット氏の講演は、氏の文学論にとどまらず、作品研究の方法論についても再考するきっかけとなった。

講演を通して、ケズナジャット氏自身が、「日本語文学」あるいは「日本文学」という肩書きのどちらを好んでいるのか、筆者には知ることはできない。また、大手書店の本棚を覗いてみると、ケズナジャット氏の作品がある時は「日本文学」コーナー、またある時は「海外文学」コーナーに置かれていることもある。いや、そもそもそうした分類法に興味がないのかもしれない。これも筆者の推測である。グレゴリー・ケズナジャットが、「グレゴリー・ケズナジャット」というひとりの作家であることには変わらないのだから。